

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12507

研究課題名(和文) 個人史から見る環太平洋地域を越境する社会運動のネットワーク

研究課題名(英文) Trans-Pacific Social Movement Network from the Perspective of Personal History

研究代表者

上原 こずえ (UEHARA, Kozue)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60650330

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では第一に、「住民運動」という集合行為/社会運動を分析した。特に、1972年施政権返還後の沖縄における石油備蓄基地建設に対し、開発候補地周辺に暮らす人びとが「豊かさ」という概念を批判的に捉え直し、環太平洋島嶼地域の社会運動のネットワークのなかで開発に抗う集合行為を組織した経緯を明らかにした。第二に、1970～80年代の沖縄で経済開発に反対する集合行為を組織した個々人の移動経験の語りに着目した。移動過程における出来事との遭遇が個々人の思想や行動をいかに培ったのか。個人の長期間・広範囲にわたる経験の運動史における意味を考察するとともに、戦後の沖縄における社会運動史について再検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は第一に、本研究は経済開発に伴う生活や生産の場としての海や土地の「囲い込み」が施政権返還後の沖縄における社会関係・階級構造の再編成をもたらし、既存の反戦・反基地の抵抗運動の主体を大きく動揺させていたことを記述した。また第二に、本研究は、施政権返還時の沖縄における「反開発」の住民運動に携わった女性たちが、総生産額という「可視の経済」にはカウントされない副次的な生業「マイナーサブシステム」(松井健)があるということ、生命を維持するための自律的生産基盤(サブシステム)としての食は命を軽視する軍事資本主義に対する根源的な抗いになりうることを提起したことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：During the research grant period, the following two issues were explored. First, I analyzed the collective action of “residents’ movements” (jyumin undo). What emerged in particular from this analysis was how people living near the proposed development site critically rethought the concept of “affluence” in response to the economic development project after the 1972 Okinawan reversion to Japan, and organized a distinctively participatory democratic form of collective action. Second, I examined the narratives of migration experiences of individuals who organized the anti-development protests in Okinawa from the 1970s to the 1980s. By examining the meaning of individual participants long-term and wide-ranging experiences within the movement, the research was able to trace the larger structural arc and existential significance of social movements in postwar Okinawan history.

研究分野：社会運動史

キーワード：社会運動 集合行為 経済開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は 1970-80 年代の沖縄における石油備蓄基地建設とそれに対する賛成または反対の住民による集合行為が生起する過程について、両者の相互作用を明らかにしてきたが、これまでの研究で課題として浮かび上がってきたのは、集合行為のなかで表出する近現代の様々な地域での経験を想起する語りを記述に組み込んでいくことであった。集合行為の組織化において重要な役割を担った個々人の経験をたどり、彼ら / 彼女らが遭遇した出来事、特に近現代における出稼ぎや移民、戦時の徴兵・避難、戦後の収容と帰還、施政権返還後の開発に伴う立ち退きといった移動・離散経験が、人びとの自己や地域共同体に対する認識をどのように培い、開発への賛成および反対をめぐる集合行為に至らしめたのか 以上の問いが未解決のまま課題として残った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第二次世界大戦後の日本および環太平洋島嶼地域における経済開発と開発候補地周辺で暮らす人びとの集合行為についての歴史社会的分析を軸に、経済開発の賛成および反対をめぐる集合行為に参加した個々人が遭遇した歴史経験と、その歴史経験が後に個々人の集合行為への参加に有する意味を明らかにするための理論構築を行うことであった。出来事の意味を抱え持ちながら生きていく個人のたどってきた足跡を通じて、沖縄戦後史、世界史の接点を見出していく本研究では、従来おこなわれてきた運動史では不在であった、集合行為を構成する多様な個々人の語りに表出される具体的経験に満ちた個人史から運動史を捉え直す記述を目指した。

3. 研究の方法

(1) 離散 移動経験を有する個々人の地域共同体の過去・現在・未来の認識に関する研究

施政権返還後の沖縄島東海岸で経済開発への賛成および反対をめぐる集合行為に参加した個々人は、どのような離散 移動を経験し、それは彼ら / 彼女らの、地域共同体の過去や未来についての認識をどのように培ってきたのか。移動のなかでどのように生き延びてきたかを想起する語りは、経済開発への賛成および反対をめぐる集合行為を促す言説にどのような根拠を与えてきたのか。これらの問いについて、石油備蓄基地建設を始めとする施政権返還後の経済開発に賛成および反対をめぐる集合行為に参加してきた個々人の語りをたどり明らかにする。

(2) 日本および環太平洋諸島の集合行為のネットワークと歴史認識に関する研究

経済開発への賛成および反対をめぐる集合行為のネットワークが生起する際の政治・経済的条件を明らかにすると同時に、そのようなネットワークのなかで地域間関係の歴史がいかに認識されたのかを考察する。同時に、現在も日本やアメリカの軍事・経済開発の動向の影響下にある環太平洋島嶼地域の間での関係性がどのように模索されてきた経緯についても考察する。

4. 研究成果

(1) 論文「金武湾とプレカリアート」では、1970~80年代の沖縄で経済開発に反対する集合行為を組織した個々人の移動経験の語りに着目し、移動過程における出来事との遭遇が個々人の思想や行動をい

かに培ったのか、個人の長期間・広範囲にわたる経験の運動史における意味を考察した。施政権返還時の沖縄における不安定就労の拡大と失業率急増のなかで、生計を立てることと基地や大企業に依存せず自立して生きることのはざまに、葛藤しつつも開発に抗おうとした人々の活動経緯や、発言記録などを追ひ、聞き取り調査も行った。

(2) 論文「繰り返されるコモンスの収奪にどう抗うか 新崎盛暉と一九七〇～八〇年代」では、1974年に東京から沖縄に移住し、「CTS阻止闘争を拓げる会」の活動を開始、1976年には機関誌『琉球弧の住民運動』を発刊するなど、1970～80年代に軍事と開発に抗う人々が点在する琉球弧を渡り歩いた新崎盛暉の活動と発言を分析対象とした。沖縄島東海岸金武湾への石油備蓄基地建設をはじめとする経済開発や米軍基地の駐留の継続は、住民たちの生活や生産の場としての海や土地の「困い込み」に他ならず、それによってもたらされた生活や社会関係の変容は復帰後の沖縄における階級構造を再編成し、抵抗運動の主体を大きく動揺させた。こうした中で新崎が行なった反戦地主に対する調査の意義に加えて、軍事基地の駐留を維持する法制度についても論じた。

(3) 論文「棄民に抗し、サブシステムを求める 移動する沖縄青年労働者の反差別・反開発闘争」では1960年代～80年代、本土資本の流入に伴う不安定就労状況や失業が蔓延する沖縄から本土に移動し、本土での労働経験を経て、沖縄にUターンした個々人が、「生活に根ざした運動」を目指し、個人や環境に負荷のかからない持続可能な運動とサブシステムの可能性を模索したことについて論じた。彼ら彼女らを、沖縄における軍隊や開発に抗う集合行為を行う新しい主体として浮き彫りにすることを目指した。

(4) 論文「生存の危機」にある沖縄戦後の運動史を捉え直す」では、米軍基地の新設・拡張と自衛隊基地の増設が進む沖縄を「生存の危機」にあると捉え、そのような中での運動史研究の課題について論じた。沖縄戦後の米軍や日本政府、資本による本源的蓄積に対して難民、労働者、住民、女性、プレカリアートといった多様な存在がどのような抵抗の方法を見出してきたのかを通史的に描こうとした。

(5) 論文“Okinawa People’s Philosophy of Direct Action against Capitalism and Imperialism from Post-World War II to the Present”では、沖縄の運動史における特に反基地の抵抗運動の現場において、抵抗運動を行う者たちが、対峙する状況や相手に向かって繰り広げる問答、交渉や直接行動に焦点を当てた。支配や抑圧によらない運動現場でのコミュニケーションのあり方が模索され、上意下達ではない行動方針の決定のあり方や意思疎通の方法など、民衆闘争の豊かな技法が編み出されてきたことについて論じた。

(6) 論文「施政権返還後の福祉労働者の闘いが提起した人間排除のシステムの問題」では、施政権返還後の沖縄で、主に福祉労働者たちによって組織されたような学園闘争について論じた。施政権返還に向けて収容者を増員させた福祉政策が合理化を迫られる中で、特に女性を中心とする福祉労働者たちが労働待遇改善を求めて、不当な解雇や移動に抗議した。施政権返還直後の沖縄における福祉医療現場における労働者の運動を描くことを通じて、精神障害者に対する国家施策のあり方、それが施政権返還＝復帰という社会変動の中でいかに行われてきたのかを論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 上原こずえ	4. 巻 9
2. 論文標題 追悼 崎原盛秀 追悼に代えて 崎原盛秀の人生と運動の思想を振り返る	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 越境広場	6. 最初と最後の頁 141-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原こずえ	4. 巻 60(1)
2. 論文標題 金武湾とプレカリアート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 24-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原こずえ	4. 巻 (47)
2. 論文標題 繰り返される commons の収奪にどう抗うか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 沖縄文化研究	6. 最初と最後の頁 639-672
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原こずえ	4. 巻 27
2. 論文標題 「生存の危機」にある沖縄戦後の運動史を捉え直す	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 年報・日本現代史	6. 最初と最後の頁 139-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原こずえ	4. 巻 306
2. 論文標題 施政権返還後の福祉労働者の闘いが提起した人間排除のシステムの問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生活経済政策	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原こずえ	4. 巻 1
2. 論文標題 棄民に抗し、サブシステムを求め る 移動する沖縄青年労働者の反差別・反開発闘争	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「東アジア連続講演会」+ 研究報告集	6. 最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Kozue Uehara
2. 発表標題 Invasion of militarism ins our lives and culture
3. 学会等名 Inter-Asia Cultural Studies Society International Conference 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 上原こずえ
2. 発表標題 変革する主体を求めて：戦後沖縄の民衆闘争の歴史的区分と変遷
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第5回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kozue Uehara
2. 発表標題 Kaho 'olawe, Kisenbaru, and Kin Bay: Towards a new transpacific commons against U.S. military capitalism
3. 学会等名 Throwing Lifelines across Borderlines
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上原こずえ
2. 発表標題 「運動と生活のはざままで：資本主義に抗う沖縄青年労働者の自立と相互扶助」
3. 学会等名 沖縄社会学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kozue Uehara
2. 発表標題 Okinawa People's Struggles against Capitalism and Imperialism after World War II
3. 学会等名 Resisting Empire and Militarization: Reasserting the Sacredness of Seas, Lands and Lives Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Kozue Uehara (Jude Lal Fernando, Editor)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Equinox	5. 総ページ数 414
3. 書名 Resistance to Empire and Militarization: Reclaiming the Sacred	

1. 著者名 上原こずえ	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世織書房	5. 総ページ数 326
3. 書名 共同の力 一九七〇～八〇年代の金武湾闘争とその生存思想	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------